

我等の婦人運動

— 平素の主張をくりかえしつつ —

一 腹背に敵をうけて

諸君、わたしは文章が下手です。ましてこれから書こうとするようなものは、なお下手です。が、わたしは「われわれは」というふうにして、この文章をはじめましょう。

われわれは知っている。

いまこそ「労働者、農民」と、革命の主体が、あたかもこの二者なるかのごとく、いわれているのを。しかしながら、ごく最近まで、世界のあらゆる社会主義およびその運動は、労働者のみに注意して、農民に対しては、少しの関心ももたなかつたのである。

最初に農民に目をつけたのは、それを「利用」せんがための、政治主義者の団体であつて、アナキストのごときは、「利用」の必要なく、したがつて「自我」にたてこもる傾きあるところから、視野が狭く、かなりおそくまで、無関心のままであつた。

それにもかかわらず、真に自覚した農民は、利用的政治主義を排し、自ら進んでアナキズムを択んだのである。もちろん、アナキストを名のる一部の無自覚者の無関心や、

フニ

無理解や、愚かな妨害を蹴つ飛ばして。

われわれは知っている。

すなわち農民と共通の運命に、いまやわれわれ婦人が置かれてあることを。われわれ婦人もまた、はじめ「利用」せんがための政治主義者のお見出しにあずかつた。——あずかりつつある。だが、一般のアナキストは、未だ殆んど婦人に対しては、愚かな情眼をつづけている。

それにもかかわらず、真に自覚した婦人は、利用的政治主義を排し、自ら進んでアナキズムを択んだ。そして当然、アナキストを名のる一部の無自覚者の無関心や、無理解や、愚かな妨害と、今まさに正面衝突を演じているのである。

かくて、われわれは、今やすべての政治主義者、および無自覚な一部のアナキストを、敵として戦わねばならない。

二 婦人運動とは何か

いったい婦人運動とは何だろう。これくらい分かっているようで、その実あいまいなものはない。

マルクス主義の意見では、婦人運動は二種類ある。一つはブルジョア婦人運動、一つはプロレタリア婦人運動であると。

ブルジョア婦人運動とは、どんなものかという、第一にはいわく「性別的の運動だ」

と。性別的の運動？ わたしはいつもいう。「諸君よ、世界におけるブルジョア婦人運動の実際を見るがよい」

たとえばブルジョア婦人運動の最も盛んなイギリスを見よう。イギリスのブルジョア婦人運動が、いくぶん実践期に入ったのは、一八六九年——アイルランド、スコットランド、ウェルスにおいて、市町村の組合に関する選挙権が、女子のために解放された時以来である。当時の記録によると、女子の有権者は、決して性別的に組織されず、その夫の属する党派に属したものである。即ち性別的の運動というものは、当初から実在しなかつた。一八八六年には、自由党に属する自由党婦人同盟が組織されたが、このとき保守党の方には、保守党婦人同盟とも見るべき桜草同盟というものがあつた。

あたかもこれは、わが国におけるプロレタリア各政治団体所属の、各婦人同盟と性格を同じうするもので、そこには党派別的の婦人運動はあつても（プロレタリア婦人運動と同じように）、何等性別的の婦人運動はなかつたのである。もつともその後盛んとなつた政権獲得運動は、その必要上、性別的の形式をとつたが、これを以てブルジョア婦人運動の全とみなし、故にブルジョア婦人運動は性別的運動であるなどというとなれば、それを全く詭弁である。もしそんな詭弁がゆるされるならば、同じイギリスにおいて、普選獲得のために、労働者団体が組織されたことをも、労働運動の全とみなし、故に労働運動とは普選獲得のための個別的運動であるなどという、はなはだ珍しい定義がくだされねばならない。

二十三年

ブルジョア婦人運動のほんとうの姿は、政権獲得以後——イギリスにあつては、一九二八年以後において、これを見なければならぬが、見よ、一九一八年直後において、皮肉にも性別的の婦人団体および運動はことごとく解散し、最も性別的色彩の濃厚であつた「国民婦人参政権組合」ですらも、直ちに「市民権均等国民組合」という、はなはだ性別的ならざる、極めて一般的なる名前に改められたのである。かくて、性別的であるべきブルジョア婦人らは、実践期に入るや否や、保守、自由、労働等の、各政党に分散してしまつて、きわめて必然的に性別的運動を否定したのである。（もつとも内部においては、衛生運動とか、母子保護運動とかをしているが、こうした種類の仕事は、ロシアのプロレタリア婦人とも共通の仕事で、特に「性別的の運動」であるとして、ブルジョア婦人運動を定義づけるほどのものではない。）

その他ドイツ、オーストラリア、エストニア、チェコスロバキヤ、デンマーク、オランダ、スエーデン等各国におけるブルジョア婦人運動の現状も、ことごとくイギリスと同じである。アメリカもそうである。アメリカには婦人党なる性別的の団体があるが、これは主として政治教育のための補助的団体で、婦人の政治運動は、共和、民主の二ブルジョア政党に分散して、行われている。

かくの如く、「ブルジョア婦人運動は性別的運動である」となす彼等マルクス主義者の認識は、全然にまちがっている。

即ち、彼等がプロレタリア婦人運動を定義していうところの「プロレタリア婦人運動と

は性別的でなく、階級的（もしくは党派別的）に合流して行われるものである」というのは、直ちにブルジョア婦人運動に、そのままあてはまるものである。ひとくちにいえば、ブルジョア婦人運動とプロレタリア婦人運動、この二つの婦人運動は、共に徹頭徹尾性別的の運動ではなく、その夫とか恋人とか父とか、もしくは口達者なそれぞれの支配者、指導者の属する党派に、はなはだ無権威的に所属し、それらの党派の命令のままに動いているところの、無自覚、無力な婦人（？）運動でしかない。

マルクス主義者は、ブルジョア婦人運動を、更に「男子に対立する」運動であるともいつているが、これももちろん認識不足の意見である。わたしをして言わしめれば、ブルジョア婦人運動は、「男子に対立する」運動ではなく、「男子化する」運動で、これはプロレタリア婦人運動とでも同じである。たとえばイギリスにおいては婦人の地方行政に関する選挙権は、一八三五年まで、男子同様に許されていた。さかのぼって一八三二年の選挙法改正までは、選挙資格者は「人」とされていた。それが「男子」と書きかえられ、地方行政の権利も奪われて以来、婦人運動はそれらの権利を回復するために、にわかに、いわゆる性別的に起こされたのであるが、それは性別的の運動であるよりは、男子と同等——即ち性別撤廃への運動であり、男子に対立する運動であるよりは、男子とひとしくなろうとする運動であったのである。

ロシアにおいては革命後「男子と同様女子も軍隊に参加せしめよ」という婦人運動が起こり、さらに最近伝えられるところによれば、レーニンが声明書を発して自慢したところ

二十七年

の「婦人解放」の一つである婦人保護——婦人の特殊的保護（夜業禁止、危険作業禁止、月経、妊産時労働禁止）の規定に対し、「かかる特殊的规定があるがため、婦人は失業の危険にさらされる」という理由のもとに、特殊規定撤廃の婦人運動が起こっているというのである。要するに、これもまた、男子とひとしからんとする、男子化せんとする婦人運動にはかならない。

かくの如くブルジョアおよびプロレタリア婦人運動は、男子と対立する運動ではなく、男子化せんとする運動である。それは男子本位制踏襲のブルジョア、プロレタリア治下において、まぬがれがたいことで、即ち男子が単位であり規準であるところから、生理的に、境遇的に、あくまで男子とひとしいか、男子に近いか、どちらかでないか、社会的評価が、実質上はなはだ片手落ちのものとなる憂いがあるためである。そこで多少の生理的不自然、苦痛をも犠牲にして、あるいは軍人たらんとし、あるいは危険作業を希望し、妊産時をも忍んで、もっぱら男性と同様ならんとするのである。

これを要するに、ブルジョア、プロレタリア、即ち従来は一切の婦人運動は、支配者側からは婦人を「利用」し、自己の党派へと手なすける運動であり、婦人側からは支配者に順応して、男子化せんと努力する運動である。そして両婦人運動を通じて、「政治運動」を主体としているのは、いかにそれが「利用」されんがためのものであるかを物語っている。即ち支配者の政治権力を確立するための「一票」的存在としてのみ、婦人は認められ、そのための運動をのみ、要求されているのである。ブルジョア政治家ミルが「婦人よ、

おん身を解放するものは参政権である」といったことは、プロレタリア政治家レーニンが、「婦人の解放とは料理女までもが政権に参加することだ」といったのと同じである。

支配者は投票がほしいのであって、「解放」などということは、ほんの付けたりである。参政権などを通じて、何の解放が得られよう。われわれは直接的の解放を要求する。それがわれわれの婦人運動である。

三 我等の婦人運動

マルクス主義者の婦人観ほど、まちがった根底と、お座なりの意見とに満ちているものはない。そのことは前にも言った通りであるが、たとえば彼等は、その経済史観を裏づけるために次のようにいつている。いわく「婦人の地位は、婦人が家庭にとじこもつて、生産に従事しないようになった時から退下した。即ち人間の社会的地位は、その人間が、その時代の経済に、寄与するか寄与しないかで決定するのだ」

だが、同じ婦人でも、農民婦人（農民婦人の数は全婦人中かなりの数であろう）などは、昔から一度も、「家庭にとじこもつて」「生産に従事しないように」なったりはしなかった。それにもかかわらず、「家庭にとじこもつた」中流や上流の婦人よりは、はるかに地位が低かったのである。婦人にあつては、「家庭にとじこもればこもるほど」そして「生産に従事しなければいけないほど」地位が高かった。否、婦人のみでなく、人間の社会的地位は、「その時代の経済に寄与しない」階級ほど高かったのである。現在のプロレタリア

国ロシアなどにあつても、一労働者や一農民よりは、白き手の共産党官僚、インテリゲンチヤ等の方が、はるかに社会的名声も、地位も高いのだ。社会的地位の高い低い、権力を握ること、および権力への利用価値のいかんによつて決定する。婦人が今日いくぶん社会的に認められてきたのは、一票の所有者として（もしくは組織の一単位として）の存在なるが故である。

かくて、われわれの婦人運動は、かくの如きまちがった意見を基礎とするところの、一切の婦人観および運動を暴露することがその一つであり、二つには政権を通ぜざる直接的の解放を目ざすこと、また三つには、あくまでも婦人としての立場からの、自意識と主張を持ちつつけることで、従来のあらゆる解放運動は、婦人に望むに常に「自意識を捨てよ。そして来たつて我々に投ぜよ。その時にのみ結果として解放されん」といつた。ブルジョア政治家は「ことさら異を立てることなく、我々の党派に投ぜよ」といい、プロレタリア政治家も「性別運動はブルジョア婦人の運動だ。名譽あるプロレタリア婦人たらんとせば、来たつて我々と同化せよ」といつている。一部のアナキストも「婦人意識なんて何のことだ。俺たちの運動といつしよであつてこそ、婦人は解放されるだろう」という、いずれも無責任な、婦人などのことは、てんで考えてみたこともない、粗雑な利用主義者たちで、無自覚、無力な婦人たちは、声に応じて、そちらへ行くのである。

だが、われわれは、婦人運動は本来性的の運動（婦人の一般人としての運動には、特に婦人運動の名をつける必要はない）であることや、男子と対立する運動（男子と対立す

る婦人こそは、最も男子にとつて協力的で、相互扶助的でありうる）であることを、少しもはばかることなく断言し、且つ実践するのである。我々は男子化することを希望しない。生理的不自然、苦痛を忍んでまでも、男子化への運動に従うことは、我々にとつては無意味である。否、我々はあらゆる生理的不自然（生殖の不自然）を、むしろ中心としてのみ、我々の主張を披瀝し、持ちつづけて行かねばならない。

かくて、更にわたしはこういおうと思う。「婦人運動は主として思想運動である」と。見よ、ブルジョア、プロレタリア婦人運動といえども、実践的には、何等「婦人運動」なるものを、少しもしてはいないのである。そして、一時花のごとく咲き乱れた（そこに婦人の自意識が多少その姿をあらわした）ブルジョア婦人思想運動のみが、ブルジョア、およびプロレタリア政治に、内容的の影響を与えたのである。例えばレーニン主義治下における婦人解放の施設はその男女同権や家庭の社会化（家事および育児の社会化）に關してはアメリカにおけるブルジョア女権主義者の思想運動を受け入れたものであり、結婚制の改善、私生児問題、母性保護等はヨーロッパにおけるブルジョア女性主義者の思想運動に影響されたものである。すなわちレーニン主義はその婦人解放の意見においてブルジョア婦人の思想にのみ負うところが多い。（プロレタリア婦人は何等婦人思想を新生していない）かくの如く、思想および思想運動こそ実社会に影響することはなほだ大きいものがある。

すなわち、思うにわれわれの運動は、今やブルジョア婦人思想を克服しつつ、最も新し

い婦人思想を胎生し、産出せんとする「婦人思想運動」を中心とするものである。